
そらごよみ

佐野介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そらごよみ

【Nコード】

N5603C

【作者名】

佐野介

【あらすじ】

普通の高校生の天道暁。しかし、普通じゃない現実が彼を待っていた。

1・意気投合

まるで念仏のような長話。ステージに立って話をするんだから、もう少し聞いてもらおう努力をしるよ、^{てんどうめがつき}と思いながら天道暁は欠伸を噛み殺した。

ここは、広磨高校。よくある私立高校だ。そして、現在記念すべき入学式の真つ最中。…だというのに。校長の念仏のおかげで、暁の気分は急降下していた。体育館の淀んだ空気のせいもあっただろう。

リスでも乱入したら念仏もこの退屈な気分も吹き飛ぶだろうに。リス、乱入してこないかな、と適当な事を考えていると、すぐ近くで欠伸を噛み殺す音がした。何気なく音がした方向、右を見る。

そこには、未だ念仏を唱えている校長をけだるそうに見る少年がいた。髪は綺麗なブラウンで、前髪は頬まで、後ろ髪は背中まで伸びている。男にしてはちょっと長い。制服を微妙に着くずして、それがとてもセンスがいいと感じた。精悍な顔立ちで、これは女子にモテそうなタイプだ。羨ましい。

観察していると、急にはっとした表情になり、真剣な顔で校長を見つめた。何をそんなに熱心に見つめているんだろうと不思議に思い、暁も校長を見つめてみる。何か変わったことでもあるのだろうか。全くわからない。相変わらず油性のテカった顔で、念仏を唱えている。

と、不意に少年が呟いた。

「あの校長…」

暁は誰に話し掛けたのかを確認するため、少年を横目で見た。しかし、少年は誰に話し掛けたというわけでもなさそうだった。少年はそれから口をつぐんだ。

「あの校長が、何？」

暁は焦らされて、先を促した。少年はちらりとこっちを見ると、

また視線を戻し真剣になった。

「…ビーバーに似てねえか？」

ビーバー、ああ、前にテレビで見た事があるな…と想像する。その想像と校長の顔が見事にダブリ、思わず吹き出して笑い転げそうになった。ビーバーに丸眼鏡を掛けると、そっくりなのだ。暁は笑わないように、必死に耐えた。思わず笑い転げたりすると、少なくとも200人の前で恥を晒すことになる。それだけは絶対に避けない。腹を強く押さえつけ、何とか我慢する事に成功した。腹筋がかなり痛み、過呼吸になる。少年は声を出さずに笑った。

「やっぱり、そっくりだよな」

「そっくりどころか、あれはどこからどう見てもビーバーだろ…」

それから少しの間、2人で息をひそめて笑い合った。暁が涙を流しそうになっていた時、少年は手を差し出した。

「俺、そつち蒼地^{まきみ}榎巳。お前は？」

暁も手を差し出す。

「僕は天道暁。宜しく」

縮こまって握手を交わす。まだ少ししか話していなかったが、榎巳とは巧くやっていける予感がしていた。

唐突に念仏が終わった。周りの人が起立しているのに気付き、2人は慌てて立ち上がる。揃って礼をする。しかし、顔は半笑いだ。

ビーバーの顔が忘れられない。

それから暁は、校長とビーバーを見ると笑わずにはいられなくなった。

よく晴れた昼下がりの午後。2人は喫茶店の喧騒の中にいた。一番奥の、片隅にある席。昼時だったせい、そこしか空いていなかった。空いてるだけでも運がいいと思うべきなのだろうか。

「まさか、入学初日から友達が出来るとは思わなかった」

暁はメロンソーダをすすりながら言った。金が無いので、これだけ出来るだけ保たせないといけない。少しずつ、ちびちびと飲んでい

く。

「俺も」

目の前の席に座っている榎巳は、パスタをラーメンのように豪快にすすって食べている。旨そうだなあ、と眺めながらメロンソーダをすすする。

同級生達の中であのビーバーが校長の高校を選んだのは、暁だけだった。だから少し不安だったのだが、これなら楽しく青春が送れそうだと。

榎巳はパスタを食べ終わると水を飲み干し、合掌した。暁は様子にならず驚いた。不良っぽい見た目からして、そういう事は一切しないという偏見をもっていたからだ。

「…榎巳って意外と礼儀正しいんだな」

頬杖をついて、メロンソーダをすすする。榎巳は背もたれにもたれかかっていた。

「何それ、見た目？」

「あ、いや、そうじゃ…」

怒らせてしまったかと急いで否定したが、それは榎巳の快活な笑い声で遮られた。

「別にいいよ。俺の髪な、これ、地毛なんだ」

「え、榎巳ってハーフ？」

「違うよ」

「へえー…」

知らぬ間に身を乗り出し、凝視してしまう。日本人でそういう髪色のやつがいるとは思わなかった。茶色っぽいのなら見た事ある。

しかし、榎巳は鮮やかな、ライトブラウンなのだ。まるで、アメリカ人が誰かの子供のような。

「赤ん坊の頃の写真でも見せてやろうか？ 正真正銘の生まれつきだよ」

「うん、今度見せてくれ」

暁はまだ半分以上残っているメロンソーダをすすり、また話を再

開させた。

「ところで、槇巳の家ってどこ？」

「高森」

「近いね。僕は伊崎」

高森のすぐ隣が伊崎で、その近くにここ、左結海さゆうみがある。

2人とも電車通学で、乗る路線も同じようだった。明日は電車の中で再会することを約束し、今日のところは解散になった。

広磨高校を選んで良かった。暁は、心からそう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5603c/>

そらごよみ

2010年10月12日08時08分発行